

# 彼女たちの「日本時代」

—— 植民地台湾の製帽業にみられるジェンダー・階層・帝国 ——

洪 郁 如

## はじめに——労働階層の女性たちが語る「日本時代」

製帽業は、日本植民統治期の台湾における花形産業の一つであった。製帽業の発展について、日本の植民地官僚は、その文明開化と殖産興業上の意義を強調している。

「文明の曙光，一朝草莽の邦土に臨み，近代的知識の利用，一旦未開の産業界に及わば，その経済状態は頓に一変して産業は発展し，新事業は勃興し，国富は俄に増殖して，半開の土民を利沢することすこぶる多きが上に，母国を裨益すること鮮やかならず。これ植民事業の文明に貢献するところ多大なる所以の一なり」<sup>(1)</sup>。

また、戦前の産業関係資料や新聞の多くは、製帽業が地方に繁栄と税収の増加、および台湾人の家庭経済に改善をもたらしたことを肯定的に評価している。そして植民統治が終わった後も、とりわけ1990年代以降、同様の見解は奇妙な形で台湾社会に存続している。つまり、地域活性化、地方振興という文脈の中で、このような植民地時期の産業「開発」の肯定的な歴史評価が、製造地の地方自治体では無批判に受け入れられているのである。

戦後台湾において、「日本時代」に対する歴史的な解釈と評価は、常に政治情勢と深く関わってくる難しい問題である。国民党政府が高く掲げる中華ナショナリズムによる歴史解釈においては、台湾の「日本時代」は、被支配、「奴隷化」された負の歴史とみなされた。「日本」は悪の権化に他ならなかった。国民党の戦後台湾における政権再建および各政治勢力による権力闘争の過程で、半世紀にわたる台湾



このポスターは、台湾帽子同業組合聯合會が、1940年代に「南方共栄圏」（戦時日本の軍政や軍事介入の下に置かれた東南アジア地域）に販路を広げようとした時期に制作されたものである。上方に中国語、下方にマレー語で「台湾の帽子、このアジアの帽子」と記されている。  
出所：小池金之助『台湾帽子的話』台北市、台湾三省堂、1943年。

社会の「日本時代」は、人々が生きた時代としての意味と価値までが否定される存在となった。そのため、民主化以降に台湾社会を主体として新たな「日本時代」の歴史記憶を構築することは、名誉回復と歴史の再評価という意味合いも強かった。長期にわたった一党独裁に対抗すべく、そして否定されてきた時代に、生き抜いたことを肯定する人々の思いは切実なものであったために、これまでの語りには、「日本時代」を美化する傾向も存在した。植民地産業が持つ開発と収奪の両面性、前者と後者の比重をどのように評価するのか。「日本時代」評価と同様に、複雑な状況に取り巻かれている。

本論文は、日本統治期をめぐり見落とされがちな視点の一つであった、台湾民衆層、とりわけ労働者層の歴史経験を明

らかにしていく。なぜなら、近年、多く見受けられる植民地「開発」と「近代化」肯定の論調に対し、労働の現場にいる彼／彼女たちは、異なる位相の「日本時代」を語ってくれるからである。戦後、われわれが植民地産業の実態を究明する際、これまでは台湾総督府、地方官庁、産業界など植民地統治側による刊行物に多く依拠せざるを得なかった。そしてこうした刊行物はその性質上、「近代化」「開発」の側面を強調するものである。植民地の戦後、もしくは帝国の戦後の文脈において、これらの資料はふたたび「近代化」と「開発」の問題を提起しようとする際の知的な供給源となっている。その一方で、植民地労働者層の独自の語りは、日本統治側、産業側の旧来の視点を突き放した目で相対化してくれる。

これまでのところ、民衆層とりわけ労働者層の経験や語りには、適切な評価が与えられてきたとは言い難い。なかでもとくに女性たちの日本時代に関する歴史叙述は、個人史・家族史を主軸に展開されているのが特徴である。このような個人を取り巻く日常的な記憶<sup>(2)</sup>は、日本時代の台湾政治、経済史の重要な出来事と比較してみると、ある意味で、公共性を欠いた「私」的な歴史と映りがちである。このため、

社会の周縁部に位置した彼女らの戦前の記憶も、ある種の「女性哀史」と見なされがちであった。本論文は、「個人の苦難史」とみなされてきたこれらの語りを再評価する試みでもある。この試みによって植民地台湾の「近代化」理解を乗り越え、日本統治期台湾研究をさらに深化させたいと思う。ここでは彼女たちの日本時代の語りを分析する際に、貧困とジェンダーの視点から労働問題に焦点をあてる。すなわち彼女らの語りの中に、植民地経済とジェンダーの不平等がどのように反映されているのかを、具体的に検討していく。

日本植民統治期、学校教育の機会に恵まれなかった台湾人女性たちの回想には、労働現場について比較的多くの叙述が見られる。エリート層が学校教育の経験を中心に叙述しているのと比較し、異なる階層的な特徴が顕著に表れたものといえる。こうした台湾人女性労働者の語りは、二つの意味で日本の台湾統治史研究に重要な意義を有している。第一に、「日本時代」をめぐるこれまでの語りに対して、「女性」「労働者」という新たな視点を加えるものであること。第二は、植民者や官庁、資本家によってもたらされた植民地台湾の産業化・近代化という見解に対し、労働現場と台湾民衆からの視点を提供する、という点である。

次に、本論文の分析対象となる謝雪紅と呉廖偷の語りの記録について簡単に説明する。

労働者自身による文字記録の欠如は、歴史研究とりわけ民衆史研究が常に直面する問題である。その点は、植民地においては教育政策にも関連しており、困難は一層、大きかった。そうした中で、製帽業の中心地である台湾中部出身の謝雪紅と呉廖偷からの聞き取りには、共通して製帽業の労働に駆り出された経験が記されており、非常に貴重な記録である<sup>(3)</sup>。謝雪紅は1901年に彰化街の労働者家庭に生まれた。呉廖偷は1918年に清水武鹿庄の廖家に生まれ、生後5ヶ月で呉家に養女に出された。二人は共に、正規の学校教育を受けていない。二つのテキストに共通するのは、彼女らの語りが他者によって記録されている点である。

謝雪紅はのちに台湾共産党の創始者となり、二・二八事件の武装抵抗に参加した、台湾史上の著名な人物の一人である。彼女の自伝はパートナーの楊克煌が筆記し、楊克煌の長女楊翠華が中国から台湾へ持ち帰り、1997年に公開・出版した<sup>(4)</sup>。近現代台湾の左翼運動への関心から、研究者の間にはこの自伝の史料的价值、とりわけ自伝の後半部分にあたる、謝が政治運動に身を投じてからの部分が、当初から注目を集めてきた。これに対し、本論文が焦点を当てたいのは、これまで重要視されなかった同書の前半部である。彼女の幼少期から成人期までにあたるこの部分は、

非識字労働階層の日本時代の歴史記憶を詳細に綴っており、文字記録が少なかった台湾民衆史・社会史にとって、きわめて貴重な資料となっている<sup>(5)</sup>。

一方、呉廖倫の一生を第一人称で描いた書物は、郷土史家の呉念融が彼女に行ったインタビューを2010年に出版したものである。語り手の呉廖倫は、台中の清水に位置する紫雲巖という道教寺院に隣り合った百珍香餅店（菓子屋）<sup>(6)</sup>の創業者である。同書は、1990年代以降の「おばあちゃんのお話（阿嬤的故事）」という女性のライフ・ヒストリーを記録する運動の精神を受け継いだものである。

### 一. 多就業化からみた貧困とジェンダー：副業と隠された植民地経済問題

謝と呉のテキストに入る前に、彼女たちの労働を理解するための概念整理が必要である。一つは、これまでの文献資料のなかで、彼女らの製帽業での労働を指して「副業」と説明されている点の妥当性であり、もう一つは、製帽という「副業」を含んだ、彼女らの多就業化の実態である。まず、文献上で彼女らの「副業」と称された労働形態は、経済史と個人史の間で、それぞれどのように位置付けられてきたのだろうか。日本統治期の台湾で芽生えた近代産業を語る際、一般的に台湾現地の原料の使用、技術と資本の導入、市場の開発と輸出により、生産が向上し、販売網が拡大した点が強調されてきた。しかしながら産業成立の裏側にあった、台湾社会の下層部、つまり植民地による廉価な労働力の供給については、十分に意識していたとは言い難い。こうした植民地の経済構造には、階級と民族、そしてジェンダーの問題が複雑に交錯している。

この点は涂照彦と柯志明の米糖産業研究からも見て取れる。日本帝国主義と資本主義の後進性によって、植民地政権は台湾において地主階層を温存せざるを得なかった。このため、土地集中政策を採用せず、農業部門で原料を取得する経済的、政治的なコストが安価であったため、欧米の植民地で盛んに行われていたプランテーション的な大農場経営とは全く異なる産業景観が出現することとなった<sup>(7)</sup>。小農の経営する家庭農場を維持することで、自己搾取方式で農業生産が進み、家庭労働力の無償投入、収穫量の増大、土壟間（米）、製糖工場（砂糖）へ販売し、これらを米糖、製糖業経営資本や商社が日本内地へと転売する。台湾農民は衣食を縮減すると同時に、現金を獲得するため、生産した米は商品として市場で販売し、その代わりにさつまいもや雑穀などを日常的な主食としていた<sup>(8)</sup>。涂照彦は農民の家計調査から、農民層の分解現象について、一部の富農は子女に教育を施す余裕があったが、

それ以外の農家は困窮し、現金支出が生活を逼迫し、借金率が極めて高かったと指摘している<sup>(9)</sup>。

労働者層の台湾人女性の語りには、多就業形態がごく一般的に登場する。そして製帽業での労働もその一つであった。多就業を生み出した根本的な原因は、ひとつの仕事では生計を維持することができなかったことである。それは、賃金の低さだけでなく、安定した職場、持続的な雇用がなかったからでもあった。呉廖倫についてみれば、養父は石を担いで運ぶ人力運搬を主業とし、夫は木工職人で、媳婦仔（シンブアー）<sup>(10)</sup>の彼女は家事手伝いのほかに、8歳から毎日家で帽子を編み、15歳から製帽原料工場で7年間働いた。結婚後は、山へ柴、虫の巣、そして相思樹の枝を拾いに行き、自家用、販売用とした。また夫婦で古着の行商やビーフン販売をして稼ぎ、菓子屋の創業に至った。こうした労働の記憶は、彼女の「日本時代」をめぐる語りの大部分を占める。

また、謝雪紅が語った前半生は、日本統治期の女性の労働生活史に関する詳細な記録である。父は彰化と台中を往復して人力で荷物を運ぶ苦力であり、母は日本人家庭で洗濯と子守をして働き、謝雪紅は三食の準備と、弟の面倒を見たり、家畜の世話などの家事を担当し、母と同様に日本人家庭での子守もした。兄は木工職人であった。父が倒れてからは主な収入が絶たれ、医療費の債務が増えた。少女時代の彼女は母と一緒に林投糸の原料生産に従事したが、母の死後は媳婦仔として売られる運命から逃れられなかった。雑貨店を経営する養家は、紙製のランプ製作に従事しつつ鍋の補修なども行っていた。彼女は炊事、バナナの運搬、豚の餌やり、さらに製糖会社で甘蔗の種をまく臨時季節工も勤めた。このような複数の労働を行いつつも、彼女は残りわずかの体力を尽くし、編み物を自分の「副業」として稼いでいた。亡くなる前の謝雪紅は、甘蔗の臨時季節工の労働経験を次のように位置付けている。「私が持ち帰った給料はすべて洪家に渡し、彼らは明細書を苦力頭の家へ持って行き、現金に変えた。私の従事した作業は、封建制度と資本主義という二つの抑圧と搾取を同時に受けた具体的な事例だった」<sup>(11)</sup>。

公的な統計資料や調査記録におけるこうした女性労働力を中心とした多就業形態は、常に「副業」と名付けられるが、労働者家庭にとっては「主業」収入の不足を「補填」するために不可欠な存在であった。実態としては、「主業」の脆弱性と貧困化が、植民地民衆家庭において「副業」が活況を呈した要因である。「副業」の有無とそこからの収入の多寡は家庭の死活問題であった。副業を称賛、推奨した日本統治期の文献史料を利用する際には、当事者（＝労働者）の観点を理解し、植民地

当局や産業界の視点を無意識のうちに内面化しないよう、注意が必要である。

## 二. 製帽業における労働と語り

本節では、植民地台湾において特に「本島婦人の副業」として知られる製帽産業を中心に、植民地女性労働の歴史的意味について考察する。謝と呉の自伝の共通点として、製帽業が少女期の労働経験として記されている点がある。製帽業全体の概況、そして植民地官僚と産業界の見方と照らし合わせつつ、「小さい歴史」とされた彼女たちの語りを、「大きい歴史」のなかで文脈化し、今一步、深い理解を目指したい。

製帽業は日本統治期台湾の重要な産業のひとつであり、台中州の大甲、清水、苑裡一帯を主要な製造地とした。主力商品は、大甲帽、林投帽と紙帽であり、生産額は毎年数百万円に達し、労働者は約15万人いたとされる。これら製品の多くは神戸港を通じて欧米へと輸出された。1940年代に太平洋戦争が勃発した後は、従来の販路が断たれたため、日本軍政下にあった地域や軍事介入を行った東南アジア地域にも市場の拡大が試みられた<sup>(12)</sup>。1916年、日本国内の帽子生産量において、台湾は沖縄を上回り第一位となった<sup>(13)</sup>。その背景として、沖縄県当局が放任政策を採ったのとは対照的に、台湾の製帽産業の発展には総督府の「指導奨励」があった点が指摘される<sup>(14)</sup>。

ここで留意したいのは、製帽業の土台として、台湾現地には日本の領有以前からゴザ製織の手工業技術が存在した点である。清朝統治期、大甲地区の女性はすでにゴザを編んでおり、はじめは家庭、贈答、物々交換用であったが、徐々に商品化され、市場経済主導の織物となり、島内消費のみならず、対岸の中国大陸へも輸出されるようになった。こうした基盤を背景として、日本統治期には、日本人が積極的に帽子製造の技術を普及させ、製帽業を台湾西海岸地区の重要産業の一つとなるまでに発展させたのである<sup>(15)</sup>。

原料の供給は、生産の主力商品となる帽子の種類の変化を大きく左右している。大甲帽・林投帽はそれぞれ大甲藪と林投葉などの地元原料を利用して編まれた重要商品であるが、林投葉の分布範囲は大甲藪よりも広く、原料の獲得が比較的容易であった。全島での帽子生産量についてみれば、紙帽出現以前は林投帽が常に首位であり、1910年から15年の間は大甲帽の3倍から84倍で、1915年のピーク時には、248万9,890個であった<sup>(16)</sup>。しかし1915年、「東洋のパナマ帽」と称された紙帽が

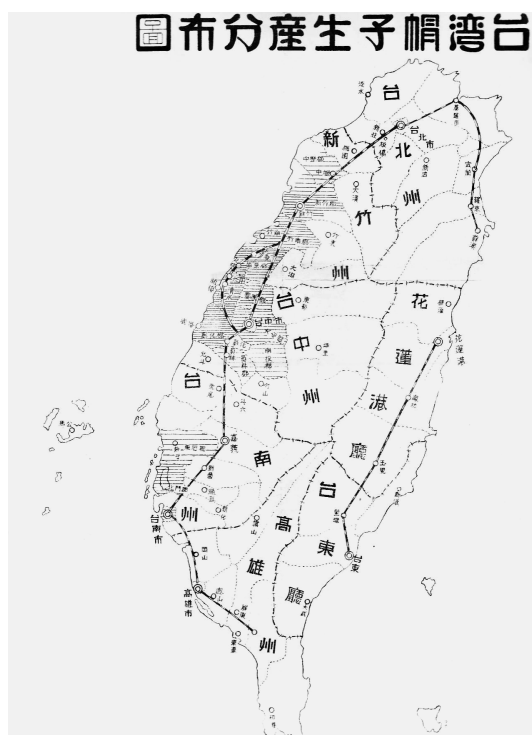
台湾で大量生産されるようになると、直ちに林投帽の地位に取って代わり、1916年前後から台湾帽子の主流となった<sup>(17)</sup>。その後の『台湾帽子要覧』の統計では、全島帽子生産量のうち、紙帽が半数以上をしめ、生産高でもトップに立っていた。1931年の最盛期、紙帽の生産数量は大甲帽の139倍、林投帽の3,503倍に達した。原料が不足した1941年でも大甲帽の4倍、林投帽の10倍の生産量を維持していた<sup>(18)</sup>。

製帽業の中心的な労働力は台湾人女性であった。このため、日本統治期の台湾製帽業に関連する文献資料には、必ずと言っ

ても良いほど、台湾人女性の役割が強調されている。このような「本島婦人」への視線には、植民地統治と経営の視点が明確に示されている。要するに、日本統治当局が技術を導入し、製帽業を発展させ、台湾の人々に恩恵をもたらしたと自画自賛する論調のものが多かった。とくに家庭の副業という側面から、製帽業は、工場と機械に拘束されず、「家庭に蟄居する」（閉じこもる）台湾人女性には最適だと主張している。実は製帽業の興隆にともなう帽子検査費用と税金が、地方政府と台湾総督府を潤した<sup>(19)</sup>という側面も無視できない。

製帽業の関係史料において、台湾人女性労働者の記述の多くは、帽子を編む部門に偏っており、原料処理部門についてはほとんど注意が払われていない。以下の謝と呉の事例では、編むこと以外にも、謝雪紅は林投帽の原料加工、呉廖倫は紙帽の原料加工にも従事していたことが知られる。

謝雪紅は、彼女が9歳から13歳までの製帽産業での就労経験について詳細に描写している。父が重病にかかり、もともと住んでいた借家を追い出され、彼女は母と家計の重責を担い、林投帽の原料加工および制作の仕事につかざるを得なくなっ



出所：台中州勤業課編『台湾に於ける帽子』台中，台中州勤業課，1933年。

た。

「この時、母は林投の葉肉の削り落としと、帽子編みの作業に従事し、私は母を助けてこれらの作業を行った。過労と精神的な負担から、母は次第に健康を害した。家に借金取りが来る時は、母は一人で目を真っ赤に泣きはらしていた。それから、生計の一部を支える私の肩に、さらなる重圧がかかってきた。当時私はわずか9歳だった」<sup>(20)</sup>。

彼女が9歳であった1909年当時は、折しも林投帽の勃興期であった。台湾全島の生産量は1910年の53万5371個から、彼女が製帽業から離れた1913年には約3倍の149万236個に増加していた。一方で、同時期の大甲帽は1910年の16万9747個から、1913年の1万9881個にまで急減している<sup>(21)</sup>。

1915年に総督府殖産局が出版した『林投帽製造業調査』の中では、原料加工業者を、作業の5段階に応じて、生葉採取業・葉裂業・煮沸業・肉削業・漂白業に分類している。謝雪紅は生葉採取以外の加工段階のすべてに加わっていた<sup>(22)</sup>。彼女の口述本の中では、産業資料には見られない女性労働者の視点から、これらの作業内容、とりわけ長く従事した「肉削」作業について細かく記述されている。

まずは、煮沸工場から持ち帰った林投葉の肉を削ぐ情景である。

「工場からの林投の受け取りは激しい戦いだった。職工が尖った竹竿で柔らかくなった林投の葉を取り出し、一束一束地面に放り投げると、女性たちは争ってそれを地面から奪い取る。多くの林投を取れば取るほど、工賃が増えるからだ。鍋から上がったばかりで熱気がもうもう立ち上る林投を奪い合う時、よくやけどをした。わずか10歳の私は、負けじとばかりに大人たちとつかみ合った。すばやく動くだけでなく、しっかりと見極め、どの束が削ぎやすそうか、どの束が固くて削ぎづらそうかを瞬時に判断する。それが作業効率に影響してくるからである。林投を受け取ったら、店員に記録してもらい、家へ担いで帰る。家へ帰るとすぐに林投の束を折りたたんで、乾燥して削ぎづらくならないよう、何かで覆っておいた」<sup>(23)</sup>。

台南以外の地区では肉削業は煮沸業者による経営が多く、その作業は工場よりも、家庭内で行うことが多かった。謝雪紅はその作業を次のように描写している。



「削りとは、よく煮込んだ林投葉が完全に乾くまでの時間に、ブリキで出来たはしご状の簡単な刀を使って、葉の両面の皮と肉質の部分を完全にそぎ落としていく作業だ。一般的に言えば、一枚の葉を四、五回削いで、残った細長い繊維がいわゆる林投糸である。そして、所定のまとめ方に従い、百本を一束にし、五束を一つにまとめて大きな束にし、担いで納入しに行く。店主が加工された林投糸の長さや、裂けていないかどうかなどの良し悪しを見て、その品質に応じて工賃を支払う。うまく削ぐことが出来ず糸を切ってしまった人は、給料をもらえないばかりか弁償しなければならなかった。私は林投葉の削り作業に長く関わり、10歳から13歳で家を出るまでの三、四年間はほぼこの作業だけをしていた」<sup>(24)</sup>。

総督府の調査によると、彰化地区では煮沸した原料1万本を交付し、8千本を仕上げて納入すると60銭が支給され、9千本納入すると80銭であった。個別の契約内容にもよるが、仕上げ千本に付き、賃金は約8-10銭であった<sup>(25)</sup>。原料処理の過程で、林投葉を削ぐ「肉剥」という作業は最も人手を必要としたが、労働従事者数に関する正確な資料は欠落している<sup>(26)</sup>。謝雪紅の家では母親とともに、彼女と弟も夜遅くまで作業に従事したことが記されている。

「林投の葉を削ぐ作業は主に母と私が行っていた。毎日暗くなってkia仔〔石油ランプで、ガラスシェードを持つものを番仔油灯と称した〕に火を灯して作業した。(弟の)真南はどちらかというと遊びのほうに熱心だった。といっても作業を強制的に手伝わされることもしばしばあった。夜、子どもたちが眠くなると、母は林投の葉を削ぎながら、封建的、迷信的な昔話を我々に語って聞かせ、元気を出させた」<sup>(27)</sup>。

このほか、9歳の謝雪紅は母とともに、彰化市内にある天公壇という道教寺院の裏で、「肉剥」完了後の林投糸の漂白作業にも従事していた。彼女は以下のように詳細に描写している。

「そこは、林投原料加工の最終段階である漂白を専門とする業者だった。天公壇の裏の敷地にはいくつかの大鍋があり、まず男工が大鍋に漂白剤を入れて半加工状態の林投糸を茹でる。よく煮込んだのち、私たち女工が林投糸を水でき

れいにゆすぎ、漂白剤の匂いを落とし、一束一束を寺院裏の屋内で乾かす。半乾きの段階で、女工が糸を真っ直ぐに揃える。林投糸の表面は滑らかで、裏面は粗いため、粗い面を内にするよう、糸を丸く巻き込む必要がある。こうして、林投糸の加工はすべて完成する。当時、女工の一日の工賃は、わずか1毛（10銭）ほどだった」<sup>(28)</sup>。

政府と産業界によって女性労働の花形と称された帽子編製に至っては、工賃は比較的高かったが、高い技術と根気とを必要としていた。彼女は製帽作業について次のように語っている。

「当時、一部の帽子業者は、林投糸の加工業者〔この種の業者の資金力は比較的、小さかった〕から加工された林投糸を購入し、女性たちに下請けに出し、自宅で帽子を編ませる。私も少しだけ編んだ経験がある。普通の帽子を一個編むと、大体一、二日、あるいは二、三日かかり、工賃は7、8毛（70、80銭）から1円ぐらいたった。この作業は勤勉で手先が器用な人でなければできなかった。真っ白で細長い林投糸で編んだ上等な帽子が買い上げられたら、工賃は一個あたり3、4円にもなったが、素晴らしい技術がないといけなかったし、多くの時間を使って編まねばならなかった。これは、当時の女性が最もお金を稼げる仕事だった」<sup>(29)</sup>。

こうして仕上がった帽子本体は日本内地に移出され、そこで仕上げ加工と飾り付けが施された。こうした付加価値が付いて価格を上げた後の商品は、その多くが神戸港から海外へ輸出され、そのうちの一部が台湾島内の市場に回された<sup>(30)</sup>。

「きれいに編まれた帽子もまだ完成品ではなく、製帽商はそれを日本に移出して貿易商に売り込み、日本の貿易商〔神戸が中心で、大部分は台湾人だった〕はそれらを購入し、再加工していた。まず帽子をいくつかの等級に分け、大小異なる帽子のサイズを設定し、帽子の表に布リボン〔黒が多い〕、裏面の縁に汚れ防止のレザークロスを縫製し、上等な帽子の裏には革の帯を縫い付けていた。このように、ひとつの林投帽が完成すると、貿易商はそれを卸売業者に販売し、一部はそのまま小売店に卸される。こうした帽子は価格が高く、ふつうの台湾人には買えなかった」<sup>(31)</sup>。

原料加工から、編製、成品、移輸出に至るまでの製帽産業の一連の生産販売過程は、植民地における資本主義と帝国主義が交錯した重層的な産業構造の投影であり、その底辺部に、台湾の労働階層女工の存在を確認することができる。

しかしながら、重要産業である製帽業を含め、多就業形態の収入は長期的な安定性を欠いたものであり、労働者はあれこれの収入をかき集めて家計を維持せざるを得なかった。

「母と天公壇の裏で林投糸の漂白作業をしていたが、工場の閑散期には、観音亭の前にある薬局の裏に行って、箭標という餅を仕入れて行商していた。……10歳ぐらいの時、家事、炊事、食器洗い、養豚、柴刈、野菜栽培のほかには、主に林投葉を削ぐ仕事をしていた。林投の葉を工場から担いて帰るのはほとんど私の仕事であり、一回に5千から1万本も運ばねばならず、当時の私はかなり無理をしていた」<sup>(32)</sup>。

これらの労働に関わる語りの多くは、家族史と密接に接続しており、家族成員による複数の労働経験が相互に影響しあう。謝雪紅の場合は、まず両親の過酷な労働状況と相次ぐ死去がある。父については以下のように述べている。「彼は一生、長距離の荷物運びであったが、1908年の台湾鉄道〔いわゆる縦貫鉄道〕が全通した後、父のような荷担ぎの苦力は時代遅れになった」<sup>(33)</sup>。過労を重ねたため肺結核を発症したが、困窮のため病院にかかれず、亡くなった。その後、母も父の後を追うようにして亡くなった。「医者には私たちに母が狭心症を患っていると告げたが、その根本には貧窮があり、貧窮が彼女の人生を疲弊させ、貧窮が彼女を病気に追いやり、良い医療も受けられなくしたのだ」<sup>(34)</sup>。複数の仕事を掛け持ちしても、なお貧困から脱却することができない。こうした実態が、日本統治期に貧困層がしばしば子女を養子、妾、媳婦仔に出したことの背景にある。謝雪紅の家族史がこの点を物語っている。

### 三. 紙帽の原料製造工場における労働の記憶

呉廖偷が住んでいた清水一帯は、日本統治期には台湾で有数の製帽地であった。ただし、原料加工部門の労働に関する当事者の記録はほとんど存在していない。その中で、呉廖偷は女工の視点から、この労働史を淡々と描写した貴重な記録である。

幼い頃から媳婦仔であった彼女は、15歳の時に紙帽の原料工場に入り、22歳まで、8年にも及ぶ女工生活を送った。

「(仕事場所の)草館は今の萬善堂(無縁仏を供養するための寺院)の足元にあった。萬善堂付近の低地には、マコモダケの田んぼが広がっていた。草館は高い場所にあり、赤レンガの壁が連なっており、小さな門が幾つか開いていた。黒笠仔草(紙帽の原料)が運び入れられると、私たちは織り始めた。私は15歳ですでにきれいな日本式の結びを作ることができた。草館に生活の糧を求めたのは15歳の時で、22歳[子供が生まれた年]までの生活の全てだった」<sup>(35)</sup>。

呉廖倫の口述に登場する「山本草帽株式会社」とは、台中州大甲郡清水街で1922年(大正11年)に開設された山本紙帽子原料工場であったと考えられる。またの名を台湾紙帽子原料製造工場といった。工場主は山本仁太松といい、製帽業の生産段階から言えば、当該工場は中間の原料加工部門であった。1930年代、清水の紙帽原料生産は最盛期を迎え、工場は1929年の3ヶ所から翌年には7ヶ所、さらに1931年には16ヶ所まで急増したが、1932年と34年(1933年のデータは欠落)には12ヶ所に、1935年には急減して3ヶ所となり、その後は2-5ヶ所前後で推移した<sup>(36)</sup>。台湾紙帽の原料紙はマニラ麻で作られた強靱な和紙で、多くは日本内地から移入されたものである。山口、高知、岡山、静岡等の製紙工場で、製帽用の幾つかの幅の紙テープが作られていた。それがさらに兵庫、岡山、静岡、岐阜、東京諸府県にある原料工場に送られ、紙撚り、染色、セルロイド(Celluloid、硝化繊維と樟脳などで作られた合成樹脂の一種)引きなどの加工を経て、帽子織りの原料として完成される<sup>(37)</sup>。台湾島内でも原料工場は清水を含めて十数箇所あり<sup>(38)</sup>、山本紙帽子原料工場もその一つだった。

1916年前後、紙帽が林投帽・大甲帽に取って代わったという激変があった。日本統治期に出版された台湾帽子に関する史料は、概ね三つの解釈を提示している。第一に、林投帽漂白原料の価格が高騰したこと、第二は、林投帽と大甲帽に対して紙帽の品質と規格化が高度であり、市場販売に有利であったこと、第三は紙帽の原料の供給と品質が林投帽と大甲帽より安定し、安価であったこと。実際に、植民地の製帽業の発展によって日本内地の産業が得られた利益は、原料供給部門に大いに反映された。紙帽の原料はすべて日本内地の製紙工場から供給されたのである。1917年から18年に原料紙の移入額は50万円以上にもなり、紙帽生産総価額の3

分の1にも達した。原料部門を差し引いたあとの紙帽の利益は大きく損なわれていた<sup>(39)</sup>。

製帽業の各生産部門において、女性は重要な労働力となっており、1926年に8歳の呉廖儉が養父に「家で50個の笠帽を編め」と命じられた<sup>(40)</sup>のは、家庭手工業の副業的な帽子編製であったが、おそらくすでに紙帽が中心だったのだろう。同地には大甲帽と林投帽を編製する伝統があったため、紙帽の編製もこの地の編成技術に依存し、伝統的な帽子価格が下落した際に、織工は続々と紙帽の編製に転じた。紙帽の編製は比較的容易で工賃も安かったが、労働者は往々にして物量作戦を取り入れて、時間をかけて高単価な帽子を編むよりも、単価は安いが作りやすい紙帽を大量に作ることで収入を上げた<sup>(41)</sup>。

1933年に15歳の呉廖儉が山本紙帽子原料工場に入り、原料生産ラインに移った際、当地の製帽業は原料の生産加工、編製から買い上げ、輸出に至るまでそれぞれに相当な規模があり、台湾人だけではなく、日本人の経営者も非常に多かった。似たような紙帽の原料工場は清水に12ヶ所あったが、山本は最も古くから操業している老舗であった。1933年のこの工場には電動機（電気モーター）1台、紙原料加工機械が3台あった<sup>(42)</sup>。彼女が工場に入った前後に雇用者の数は激増し、1932年には男工2人、女工14人であったのが、1934年には男工14人、女工27人となった。1935年には街の工場は減少したが、女工の数は変わらず、男工は6人となったが、この後には女工の数も半減する現象が見られた。1936年には13人、1937、38年には12人となり、男工はそれぞれ1人であった（以降のデータは不明）<sup>(43)</sup>。呉廖儉によれば、帽子の編製は個数によって毎月報酬を計算する。一方で、原料工場の女工は時間給であり、かつ半年を過ぎてからようやく給料を受け取ることが出来る。午前と午後の二つの勤務時間を合わせ、一日で6角7銭（67銭）の工賃となる。出勤の際には記録が必要で、これに基づいて半年後に給与が支給される<sup>(44)</sup>。帽子の生産コストを圧縮することでより多くの利潤を獲得するという原理が、製帽業の各部門には共通していたとわかる。編製部門において、仲買業者や集帽人は往々にして女工の納入した帽子に厳しく注文をつけ、様々な理由で等級を下げて安値で買い上げた<sup>(45)</sup>。同様に、原料加工部門でも女工の工賃を低く抑え、あるいは給料の遅配などの事態が発生した。

産業史料とは異なる視点から、労働者としての彼女は現場の実態を次のように回想している。

「早朝、私は機械の起動を担当しており、（私がスイッチを入れると—引用者）機械は轟々と唸り声を上げて動き始めた。私は隣近所に住む女工たちに声をかけながら一緒に工場に入った。笠仔草が切れると、機械をいったん止めて、私は配線を接続し直し、ふたたび始動させた。夏、水害が起って萬善堂から骨壺が流れてきたことがある。草館（と呼ばれた工場）にも水が流れ込み、枯れ枝のような手足の骨が見え、とても恐ろしかった。それでも山本さんは仏頂面でも出入りしていた。工場は一部屋では足りなくなり、もう一部屋を増設した」。

「山本草帽株式会社は山本氏が経営者で、彼は日本から入り婿としてやって来た。のちに娘と娘婿も仕事を手伝うようになった。日本に帰った後、娘婿も早死してしまった。若いころは、あの娘婿が私に向かって「笠仔草を織ってくれ、戻ってこい」と叫んでいる夢を見ると、私は決まって病気になった。山本さんはあまり顔立ちが良くなって、一緒に行った娘たちは彼を「ブサイク」とか「猿」と呼んでいた。私はただ静かに作業していた」<sup>(46)</sup>。

「日本時代」へのノスタルジーは、現代の人々がかつての近代化に対して持つイメージや願望と切り離せない。植民地的「モダン」の表象は、デパート、カフェなどの華やかな空間と巧妙に接合された化粧品、洋服、カメラ、腕時計、コーヒーなど商品の数々により構成されている。台湾帽子もその代表的なモノの一つである。しかしこれとは対照的に、工場労働の記憶は、資本家、帝国主義の搾取の下での悪夢と精神的な苦痛を示している。語り手の回想の中に蘇ったのは、時代性のある商品として、近代的な健康と美を象徴する流行りの帽子ではなく、機械の唸りと工場主の厳格な管理、洪水時に萬善堂から流れてきた骸骨であった。退職した後の一時期まで、自分を工場に強制的に連れ戻そうとする、高圧的な日本人雇用主の悪夢にうなされ、毎度、体調を崩したという。半世紀以上の歳月を経て、92歳となった語り手は、日本人工場主に対するやるせない気持ちを、非常に間接的な語り方で表現している。それは、工場主一家の戦後の運命を述べた彼女の語りにも現れた因果応報の考え方や、日本人経営者の風貌を嘲りの対象としたというエピソードからも読み取れる。

他方、労働を通じ手にした和菓子や海水浴場などのご褒美が、彼女の唯一の楽しみだった。

「年末になると、一箱に六個入りの日本のおもち（回想録では中国語で「麻糬」と記載されている。大福もしくは団子の可能性もある）が配られた。私だけは二箱、12個が配られ、ありがたく持ち帰って両親にさしあげた。夏には、高美海水浴場の遊泳券が配られ、私は二枚もらって、目の悪い義母を海水浴に連れていった。海辺に腰を下ろすと、打ち寄せてきた波で体が浮き上がり、まるで浮き輪に座っているような気分になった。このように七年一日の如く、苦境のなかでも頑張っただけで楽しみを見出そうとした日々は、徐々に遠ざかっていった」<sup>(47)</sup>。

植民地体制下の労働搾取の下にあっても、彼女の回想の中には絶望ではなく、忍耐と自己肯定、そして未来への期待を読み取ることができる。「何とかなる。生き抜くしかない。貧しいから仕方ない。このような厳しい環境の中で鍛えられたのだ」<sup>(48)</sup>。戦前の労働層女性を主人公にして描かれた小説は悲哀に満ちているものが多かった<sup>(49)</sup>が、回想録の中に労働階層女性自身の語りには、人生に正面から向き合う積極性と主体性がうかがわれる。

### おわりに——「日本時代」の裏側

統治者側の産業史料は植民地「近代化」の功績を謳歌しているのに対し、台湾人労働者側の語りは貧困から抜け出すことの難しさを示していた。両者の間には、深い溝がある。

労働階層女性の「日本時代」の歴史叙述には、直接ではないにせよ植民地批判が鮮やかに織り込まれている。呉廖倫の労働記憶には、「彼ら」日本人の生活は台湾人労働階層の生活とは異なり、健康で優雅なものであると映っていた。「日本人自身は何を食べるか。彼らは夏には帽子をかぶり、歯が悪くなるのでさつまいもやグァバを好まない。妊婦は真鯛粥、肉のスープを飲む」<sup>(50)</sup>。日本人は帽子で日差しを避け、健康に気を配り、高級食材を食べるといったイメージだった。謝雪紅の回想には、日本人家庭のお手伝いに行った際、残飯を持ち帰って洗って食べる辛さが描かれている。

「日本帝国主義者が収奪した植民地台湾人民の血と汗とお金によって、普通の日本人職員があのような豪華な生活を送ることができたことは、当時の私は知

る由もなかった」<sup>(51)</sup>。

謝雪紅は、のちに自らの力で読み書き技能を獲得し、売買婚から脱出し、社会主義に出会い左翼運動に身を投じた。しかし、日本統治期の台湾人労働階層の中において、「運命」から「搾取」への認識転換を遂げ、新たに解釈を行っていた者は例外中の例外であった。

日本の台湾統治をめぐる「近代化」言説が無批判に流通している現状を踏まえ、本論文では、女性労働者の語りを通じ、もう一つの「日本時代」の歴史記憶の存在を指摘した。男性労働者の語りには触れることができなかったが、「日本時代」の歴史記述を再検証するうえで、労働者の語りを、改めて植民地の政治・経済問題の文脈から捉え直し、「問題」として批判的に検証していくことが必要であろう。

※ 本稿は、2018—2022年度日本学術振興会科学研究費（基盤研究（C））「植民地台湾「少国民世代」の戦後史に関する基礎研究」（研究代表者：洪郁如，課題番号：18K11809）による研究成果の一部である。

※ 本稿は台湾清華大学の国際シンポジウム「性別正義：探索家庭，校園與職場的重構機制」2013年10月12日における筆者の基調講演（中国語）「誰的〈日本時代〉——女性口述與自傳文本中的性別，階層與帝國」の一部をもとに、大幅な改稿を加えたものである。講演原稿の和文下訳につき、一橋大学大学院社会学研究科博士課程の松葉隼氏の協力を得た。また、一橋大学大学院言語社会研究科の安田敏朗教授にも有益な助言を頂いた。記して謝意を表したい。

## 注

1. 黒谷了太郎編『林投帽製造業調査』台北，台湾総督府民政部殖産局，1915年，1頁，句読点を加筆。
2. これに対して、近年の日本帝国統治下の台湾社会「周縁史」研究のひとつの試みとして見いだせるのが、陳姪媛編『看不見的殖民邊縁：日治台灣邊縁史讀本』（台北市，玉山社，2012年）である。しかし、本稿の研究対象は同書とは異なり、植民地教育体制から排除された台湾民衆層である。彼らは社会の周縁におかれた集団ではなく、農業を中心としていた戦前の台湾で、このような非識字層はむしろ普遍的であり、台湾人口の大多数を占めていたものである。
3. 謝雪紅口述，楊克煌筆録『我的半生記』台北市，楊翠華，1997年。吳廖倫口述，吳念



融著『清水阿嬈：戴著觀音耳機的吳廖偷』台北県板橋市，遠景出版，2010年。

4. 台湾，彰化出身。1908年生まれ，彰化第一公学校，台中商業学校卒。1928年に台湾農民組合，1929年に台湾共産党に参加。戦後，二・二八事件の後，謝雪紅とともに香港に亡命後，中国に移った。1978年に北京で逝去。元妻の黄綉雀との間に三人の娘がおり，この回想録を出版した楊翠華はその長女である。
5. 自伝のなかで謝が語った台湾共産党史については，史料批判の観点から研究者の間では評価が分かれている。
6. ( ) は筆者によるもの，[ ] はもとの引用文にあるもの。
7. 柯志明『米糖相剋：日本殖民主義下台湾的發展與從屬』台北市，群學，2003年。涂照彦『日本帝国主義下の台湾』東京，東京大学出版会，1975年。
8. 涂照彦『日本帝国主義下の台湾』東京，東京大学出版会，1975年，195-199頁。
9. 涂照彦『日本帝国主義下の台湾』東京，東京大学出版会，1975年，231-237頁。
10. 将来の嫁として他家に出された女兒や少女のこと。養家に入ると正式に結婚するまでは娘と嫁の両方の身分を持つ。この慣習は清朝統治期から戦後初期まで台湾の民間社会に存在していた。名義上は媳婦仔であったが，実質的には人身売買の事例が少なくなかった。
11. 謝雪紅口述，楊克煌筆録『我的半生記』台北市，楊翠華，1997年，80頁。
12. 小池金之助『台湾帽子の話』台北市，台湾三省堂，1943年，序言，45-48頁。
13. 台湾銀行調査課編『台湾製帽業ノ現況及改善策』台北市，台湾銀行調査課，1919年，9-10頁。
14. 台中州勸業課編『台湾に於ける帽子』台中，台中州勸業課，1933年，106頁。
15. 王景怡「日治時期大甲地區帽蓆産業的産銷特色」高雄師範大学地理学系修士論文，2008年，38-41頁。
16. 台湾総督府殖産局編『台湾帽子要覧』昭和16年第7号，台北市，台湾総督府殖産局商工課，1942年，1-3頁。
17. 小池金之助『台湾帽子の話』台北市，台湾三省堂，1943年，8頁。
18. 台湾総督府殖産局編『台湾帽子要覧』昭和16年第7号，台北市，台湾総督府殖産局商工課，1942年，1-3頁。
19. 台湾銀行調査課は，台湾帽子検査費用が高コストであり，生産の負担となっていることを指摘している。1918年には，1個あたりの生産価額は48銭のところ，3銭の検査手数料が徴収され，1銭を同業公会に納付し，2銭を総督府帽子検査所に納付していたという。沖縄と内地の製帽業が徴収する費用は台湾の約1/3から1/6であった。台湾銀行調査課編『台湾製帽業ノ現況及改善策』台北市，台湾銀行調査課，1919年，75-76頁。
20. 謝雪紅口述，楊克煌筆録『我的半生記』台北市，楊翠華，1997年，50頁。
21. 台湾総督府殖産局編『台湾帽子要覧』昭和16年第7号，台北市，台湾総督府殖産局商工課，1942年，1-3頁。
22. 謝雪紅口述，楊克煌筆録『我的半生記』台北市，楊翠華，1997年，50-55頁。
23. 謝雪紅口述，楊克煌筆録『我的半生記』台北市，楊翠華，1997年，54頁。
24. 謝雪紅口述，楊克煌筆録『我的半生記』台北市，楊翠華，1997年，51-52頁。

25. 黒谷了太郎編『林投帽製造業調査』台北，台湾総督府民政部殖産局，1915年，25頁。
26. 総督府殖産局の調査では，削がれた糸の加工生産量については記載があるものの，註記で実際の生産量はおそらく2倍であることを注意を促している。黒谷了太郎編『林投帽製造業調査』台北，台湾総督府民政部殖産局，1915年，23-25頁。小池金之助も台湾帽子の年間生産額と生産価格の数字については，業者の自己申告によるもので，業者が多額の税金の納付を免れるために意図的に低い数字を申告したのではないかと疑問視している。小池金之助『台湾帽子の話』台北，台湾三省堂，1943年，3-5頁。職工数も概算であり，謝家の2人の子供が，1913年の台中州723人の職工数の人数統計（黒谷了太郎編『林投帽製造業調査』24頁）に含まれていたかは疑わしい。
27. 謝雪紅口述，楊克煌筆録『我的半生記』台北市，楊翠華，1997年，54頁。
28. 謝雪紅口述，楊克煌筆録『我的半生記』台北市，楊翠華，1997年，50-51頁。
29. 謝雪紅口述，楊克煌筆録『我的半生記』台北市，楊翠華，1997年，52頁。
30. 小池金之助『台湾帽子の話』台北市，台湾三省堂，1943年，62頁。
31. 謝雪紅口述，楊克煌筆録『我的半生記』台北市，楊翠華，1997年，52頁。
32. 謝雪紅口述，楊克煌筆録『我的半生記』台北市，楊翠華，1997年，53頁。
33. 謝雪紅口述，楊克煌筆録『我的半生記』台北市，楊翠華，1997年，58頁。
34. 謝雪紅口述，楊克煌筆録『我的半生記』台北市，楊翠華，1997年，60頁。
35. 吳廖偷口述，吳念融著『清水阿嬤：戴著觀音耳機的吳廖偷』台北板橋市，遠景出版，2010年，68頁。
36. この工場の名称は，台湾総督府殖産局編『台湾帽子要覧』昭和11年3号と昭和13年4号では「山本紙帽子原料工場」となっており，工場主は山本仁太松であった。しかし，1929年から41年の『工場名簿』ではこの工場は長期間にわたって「台湾紙帽子原料製造工場」と記載されているが，前後の年で1929年には「台湾帽子原料製造工場」，1931年には「山本帽子原料製造工場」，1935，36，39，40年の4年分には「台湾紙帽子原料製造所」とされ，最後の1941年には該当する工場が見当たらない。おそらく，戦時の原料欠乏や販路の障碍といった時局的な要因から操業を停止したものとみられる。工場主は，1930年と36年の調査では山本仁太郎と記載されており，誤記かどうかは不明である。参照：台湾総督府殖産局編『工場名簿』（昭和4年末現在）—（昭和16年末現在），1931-1943年。筆者は2010-11年に東京の不二出版による『旧外地工場名簿集成：編集復刻版』第1-6巻台湾編を使用した。そのなかで，1933（昭和8）年調査分は欠落している。
37. 小池金之助『台湾帽子の話』台北，台湾三省堂，1943年，11頁。
38. 小池金之助『台湾帽子の話』台北，台湾三省堂，1943年，11頁。
39. 台湾銀行調査課編『台湾製帽業ノ現況及改善策』台北市，台湾銀行調査課，1919年，28-29頁。原料を母国に依存していたためもあり，太平洋戦争の勃発後，台湾紙帽原料の供給は極めて大きな打撃を被った。もともと台湾島内の新竹，大甲，清水などに10数ヶ所あった紙帽原料加工工場は1943年までに消滅した。このため，台湾土着原料を使った大甲帽がまた新たに脚光を浴びた。小池金之助『台湾帽子の話』台北，台湾三省堂，1943年，12-14頁。
40. 吳廖偷口述，吳念融著『清水阿嬤：戴著觀音耳機的吳廖偷』台北板橋市，遠景出版，

- 2010年, 34-35頁。
41. 台湾銀行調査課編『台湾製帽業ノ現況及改善策』台北市, 台湾銀行調査課, 1919年, 38, 73-74頁。王景怡「日治時期大甲地區帽蓆產業的產銷特色」高雄師範大學地理學系修士論文, 2008年, 38-41頁。
  42. 台中州勸業課編『台湾に於ける帽子』台中, 台中州勸業課, 1933年, 29頁。
  43. 台湾総督府殖産局編『工場名簿』(昭和4年末現在) — (昭和16年末現在), 1931-1943年参照。
  44. 吳廖偷口述, 吳念融著『清水阿嬤: 戴著觀音耳機的吳廖偷』台北県板橋市, 遠景出版, 2010年, 70頁。
  45. 小池金之助『台湾帽子の話』台北, 台湾三省堂, 1943年, 21-23頁。
  46. 吳廖偷口述, 吳念融著『清水阿嬤: 戴著觀音耳機的吳廖偷』台北県板橋市, 遠景出版, 2010年, 69-70頁。
  47. 吳廖偷口述, 吳念融著『清水阿嬤: 戴著觀音耳機的吳廖偷』台北県板橋市, 遠景出版, 2010年, 71頁。
  48. 吳廖偷口述, 吳念融著『清水阿嬤: 戴著觀音耳機的吳廖偷』台北県板橋市, 遠景出版, 2010年, 39頁。
  49. 例えば, 龍瑛宗「ある女の記録」『台湾鉄道』第364号, 1942年10月, 呂赫若「嵐の物語」『台湾文芸』第2卷第5号, 1935年5月, 楊華「薄命」『台湾文芸』第2卷第3号, 1935年3月など。
  50. 吳廖偷口述, 吳念融著『清水阿嬤: 戴著觀音耳機的吳廖偷』台北県板橋市, 遠景出版, 2010年, 125頁。
  51. 謝雪紅口述, 楊克煌筆録『我的半生記』台北市, 楊翠華, 1997年, 43頁。